




6 林 業

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 乾しいたけ寒子の生産</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○乾しいたけ寒子の生産 ○ほだ場の管理 ○植菌とほだ木の管理 <p>1年のうち1～2月に採れる寒子が最も品質が良いので、積極的に発生管理を行って増産に努め、単価・単位収量を向上させる。寒い時期にきのこを成長させるためには、保温・保湿に努めることが重要である。乾燥と低温が続くと、せっかく芽切ったしいたけの成長が止まったり枯死したりするので、500円玉大に成長した芽に袋がけ(写真1)や、ほだ木全体へのビニル被覆などを積極的に行なう。採取前に袋やビニルを外し、1～2日外気にさらすと引き締まって良品となる。ビニル被覆の場合はほだ木全体を覆うので、蒸れに注意するとともに採取後は必ず外してほだ木に水分が補給できるようにする。乾燥が続いて成長が遅れるようであれば、天気の良い暖かい日の日中に10～15分程度散水し(写真2)、成長促進を図る。こまめに管理することで良品が分散発生し、春子の集中発生回避にもつながっていく。古ほだは水分が不足しがちであり、釘目や鉋目を3～4か所入れて倒し、降雨あるいは散水で給水して発生を促す。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>写真1 保温と保湿のための袋かけ 写真2 成長促進のための散水</p>
<p>(2) ほだ場の管理</p>	<p>風が吹き込むことでほだ場が乾燥し、きのこの変形や芽の枯死が起こることがあるためほだ場を丹念に点検し(写真3)、防風対策を徹底する。防風垣の設置や破れているところの補修をするほか、風の強いところは二重にするなど対策する。寒波の襲来により山間部では降雪が予想されるので週間天気予報に注意し、施設の破損や倒壊などの被害を未然に防ぐ。</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(3) 植菌とほだ木の管理</p>	<p>スギやヒノキの人工林をほだ場にしている場合は、暗くて寒く、雨が通りにくくなりがちなので、間伐・枝打ちを行って木漏れ日が差す程度にし、温度と水分が供給されるようにする。</p>  <p>写真3 ほだ場の見回り</p> <p>植菌後、しいたけ菌糸を原木内にいかに素早くまん延させるかが、栽培の成否を大きく左右する。2月から4月にかけては植菌と収穫・乾燥が重なり大変忙しくなるので、作業集中を緩和するためにも早期植菌に努める。植菌済みほだ木は、高さ30cm程度に棒積みして確実に仮伏せし、笠木や遮光ネットをかけるなど直射日光を防ぐ。また、散水を行って水分保持に配慮する。</p> <p>種菌は水分を失いやすく、植菌後に降雨がなければ1週間足らずで種菌の含水率が30%以下に低下し、殆ど発菌しなくなる。しいたけ菌糸のまん延が遅れると、競合する他の木材腐朽菌が優占することになる。植菌直後にほだ木全体がしっとり濡れるまで散水し、降雨がないようであれば3～4日に1回、2時間程度の散水を行い、種菌の活着を図る。仮伏せ期間は、木片駒菌では駒菌の頭部が菌糸で白くなる頃まで、成型鋸屑種菌では木口に菌糸紋が現れる頃までとし、遅くとも4月中旬には終える。</p>

(作成 林業研究センター)